

学位論文

リーディング指導における翻訳指導の効果に  
関する実証的研究

広島大学大学院教育学研究科

文化教育開発専攻

辰 己 明 子

## 論文目次

### 第1章 序論

第1節 研究の目的と背景

第2節 用語の定義

第3節 本論文の構成

### 第2章 翻訳と英文和訳に関する先行研究の概観

第1節 外国語教育における翻訳の再考

第2節 翻訳研究におけるリーディングの扱い

第3節 リーディング指導における英文和訳の問題点

第4節 翻訳プロセス研究の概観

第1項 研究手法について

第2項 日本人英語学習者の翻訳プロセスモデル

第5節 翻訳プロダクト評価に関する議論の概観

第1項 翻訳プロダクト評価方法について

第2項 日本人英語学習者を対象とした翻訳プロダクト評価尺度

第6節 先行研究のまとめ及び研究課題の設定

第1項 先行研究から得られた成果

第2項 先行研究の限界点

第3項 研究課題の設定

### 第3章 小説の翻訳プロダクト評価尺度の開発（調査1）

第1節 目的

第2節 小説の翻訳評価項目の作成過程

第3節 妥当性の検討と結果

第1項 内容的妥当性の検討と結果

第2項 表面的妥当性の検討と結果

第4節 信頼性の検討と結果

第5節 考察

### 第4章 翻訳指導による翻訳プロダクト変化の検証

第1節 翻訳指導の目的

第1項 翻訳指導対象者と材料

第2項 翻訳指導内容

第2節 小説の翻訳プロダクト評価尺度を用いた量的調査（調査2）

第1項 調査内容

第2項 結果

第3項 考察

第3節 翻訳指導による学習者の翻訳プロダクト変化についての質的調査（調査3）

第1項 調査内容

第2項 結果と考察

第5章 結論

第1節 本論文の要約と総合的考察

第2節 本論文から得られた教育的示唆

第3節 本論文の課題

参考文献

付録

## 論文要約

### 第1章 序論

第1節では、本論文の目的および背景を述べた。本論文では、以下の3つを目的としている。1つ目は、学習者に小説を翻訳課題（英語から日本語）として与え、学習者により産出される訳文を評価する翻訳プロダクト評価尺度を作成することである。2つ目は、翻訳指導の効果を量的に検証するため、学習者により産出される訳文を、小説の翻訳プロダクト評価尺度を用いて、翻訳指導の効果を明らかにすることである。3つ目は、翻訳指導の効果を質的に検証するため、翻訳指導前と翻訳指導後での学習者により産出される訳文に見られた変化を明らかにすることである。研究の背景としては、近年、外国語教育における翻訳の使用についての再評価が行われる中、日本の英語教育において、英文和訳ではなく翻訳を用いて指導を行う提案がなされているものの、翻訳指導の効果を実証的に検証する研究が少ないことから、本論文の意義を述べた。第2節では、本論文における用語の定義をした。本論文では、言語間翻訳の観点から翻訳と英文和訳を同一のものと定義せず、翻訳と英文和訳を定義上分け、それぞれを以下のように定義した。また、本論文中で示す訳文は、翻訳と英文和訳の両方を指す。

翻訳：原文の語句や文構造を的確に理解し、文脈に応じて訳語の選択がなされ、原文の内容を第3者（読み手）にわかりやすく伝えること。

英文和訳：原文の内容を考えず、記号レベルでの解説と表層的な記号変換を行うこと。

第3節では、本論文の構成が全5章で構成していることを説明した。

### 第2章 翻訳と英文和訳に関する先行研究の概観

第2章では、翻訳と英文和訳に関する先行研究を概観した。第1節では、翻訳をコミュニケーションの仲介能力と位置けたヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework, 2002）と外国語教育における翻訳の復権を目指す教育運動である Translation in Language Teaching（Cook, 2010）の影響を受け、近年、外国語教育における翻訳が再評価されていることを説明した。第2節では、翻訳研究では、翻訳とリーディングを同一のものと捉える傾向にあることを示した。翻訳過程でのテキスト理解に焦点をあて、翻訳とリーディングの関係について述べているものの、実証的研究は少ない。また、リーディング指導における翻訳指導に関する指導実践に関しても、あまり行われていない中、染谷（2010）により、日本人英語学習者を対象に実施された翻訳指導を示した。*Memories of Geisha* を用いて、異文化理解と英文和訳的発想から翻訳的発想を促すことに焦点をあてた翻訳指導が行われた。その結果、翻訳指導前では、学習者は辞書の訳語を当てはめ訳文を産出していたが、翻訳指導後では、学習者

は、文脈をイメージして訳文が産出されている傾向にあることがわかった。

第3節では、リーディング指導における英文和訳の問題について概観した。英文和訳の問題として、①時間的浪費（静，2002），②文脈を考慮せず，原語と訳語の一对一対応により英単語を日本語に置き換えた日本語として不自然な訳文や誤訳の産出（卯城，2009；羽鳥，1982；山田，2006）がある。これら英文和訳が抱える問題に対して，翻訳は有効であると議論されているものの（染谷，2010）その効果に関する実証的研究は少ない。また，これまでの先行研究において，英文和訳と翻訳について十分に定義されていない点についても問題として，指摘されている（染谷・河原・山本，2013）。

第4節では，翻訳プロセス研究について概観した。第1項では，これまでの翻訳プロセス研究において，翻訳者の思考過程を明らかにするための研究手法として，主に思考発話法が使用されてきた。第2項では，日本人英語学習者の翻訳プロセスを概観した。染谷（2010）により，文章理解モデル（Van Dijk & Kintsch, 1983）を援用した，翻訳プロセスモデルをもとに，日本人英語学習者の翻訳プロセスモデルを示した（図1）。文章理解モデルでは，文章理解を，テキストベース（文章を構成する言語についての表象）と状況モデル（テキストベースでの理解に加え，読み手の知識や推論を合わせた文章内容についての表象）から構築される表象であると説明している（Kintsch, 1998）。文章理解モデルを援用した図1の日本人英語学習者の翻訳プロセスモデルにおいて，日本人英語学習者の英文和訳と翻訳の訳出過程を説明した。

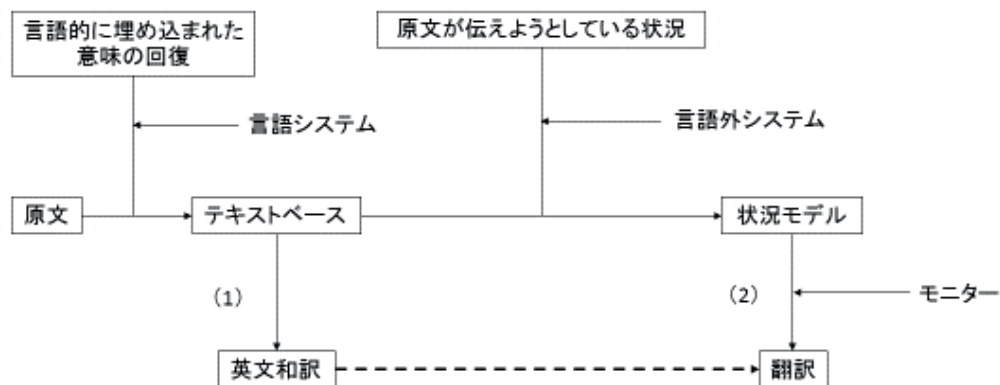


図1 日本人英語学習者の翻訳プロセス

注) 染谷（2010）による翻訳プロセスモデルをもとに筆者により作成

第5節では，翻訳プロダクト評価について概観した。第1項では，翻訳プロダクト評価方法に関する問題として，主観的な評価基準が指摘された（House, 2001; House, 2009, p.225）。第2項では，日本人英語学習者を対象とし，石原（2009）により作成さ

れた翻訳プロダクト評価尺度, 評価項目セットについて概観した。評価項目セットは, 3つの観点(正確さ, 分かりやすさ, 適切さ)と9項目で構成されていた。

表1 評価項目セットの各観点と項目(石原, 2009)

| 観点        | 項目 | 項目内容                        |
|-----------|----|-----------------------------|
| A. 正確さ    | 1  | 原文の語彙や文法を正しく理解して訳している       |
|           | 2  | 原文の文の繋がりや段落の構成を正しく理解して訳している |
|           | 3  | 原文の伝える情報や作者の意図を正しく理解して訳している |
| B. 分かりやすさ | 4  | 必要に応じた言い換えや省略, 補足などがなされている  |
|           | 5  | 訳文の一文一文が日本語として自然である         |
|           | 6  | 訳文全体が読者にとって分かりやすい           |
| C. 適切さ    | 7  | 原文の文脈に即して訳文の語や表現を選択している     |
|           | 8  | 訳文の文体が一貫している                |
|           | 9  | テキストのジャンルや目的に応じて訳している       |

新聞記事を翻訳課題として用い, 作成された評価尺度の妥当性と信頼性は検討され, 確認された(Ishihara, 2009; 石原, 2009)。

第6節では, 前節までに述べられた先行研究に関する限界点を指摘し, 本論文の研究課題とした。先行研究の課題として, ①翻訳指導の効果に関する実証的研究の不足, ②テキストの種類を設定した新たな翻訳評価項目の作成という2点が指摘された。②を指摘するにあたり, 批判的検証として, 小説を翻訳課題とした場合, 石原により作成された評価項目セットの信頼性を検証した結果, 高い信頼性は確認できなかった。その理由として, 以下に示した評価項目セットの限界点が影響していると考えられる。

- (1) 各項目に対する評価基準が設定されていないこと
- (2) 評価項目に小説の特徴に関する項目が含まれていないこと
- (3) 専門家による, 評価項目セットの妥当性について検証がなされていないこと

先行研究と評価項目セットの限界点の受け, 本論文では以下の3つを研究課題として設定した。

- (1) 教室内での使用を目指した小説の翻訳プロダクト評価尺度とは, どのような観点と項目で構成されているのか(調査1)。
- (2) 翻訳指導によって, 学習者の訳文を評価する小説の翻訳評価尺度結果に, どのような変化が見られるのか(調査2)。
- (3) 翻訳指導によって, 学習者の訳文には, どのような質的变化が見られるのか(調査3)。

### 第3章 小説の翻訳プロダクト評価尺度の開発（調査1）

第3章では、研究課題の1つ目に答える調査を実施した。第1節では、本章の目的を示し、教室内での使用を目指し、既存の翻訳プロダクト評価尺度をもとに、妥当性と信頼性を伴った小説の翻訳プロダクト評価尺度を作成することを述べた。第2節では、本章で作成した小説の翻訳評価項目は、3つの段階を経て作成されたことを以下に示す。

#### 小説の翻訳評価項目作成の過程

##### ・段階1

英語教育を専攻とする大学院生により、石原により作成された評価項目セット（石原，2009）を用い、小説を翻訳課題（村上春樹作「かえるくん，東京を救う」の英訳，*Super Frog Saves Tokyo* の冒頭部分）とし、評価対象者である私立大学で選択制英語授業を受講する16名の大学生により産出された訳文を評価した後に、評価項目セットについてコメントを求めた。大学院生によるコメントは、以下に示す。

表2 評価項目セットに関する大学院生のコメント

| 大学院生のコメント内容   |
|---|
| ① 各項目（項目1～項目9）を5件法で、学生の訳文を評価する際、各項目に対する明確な評価基準がないため、評価することが難しい。                       |
| ② 項目2は、学習者の訳文から評価することが難しい。  |
| ③ この項目では、小説の訳文を評価することが難しい。  |
| ④ 観点「分かりやすさ」の項目について、項目4「言い換えや省略，補足」，項目5の「日本語として自然である」，項目6の「読者にとって分かりやすい」について説明が必要である。 |
| ⑤ 観点「適切さ」の項目8で訳文の文体についての評価について、学生の訳文から文体が一貫されているかどうかを評価することは難しい。                      |
| ⑥ 項目9で学生の訳文から、テキストの目的を理解しているかどうかを判断することは難しい。  |
| ⑦ 「分かりやすさ」と「適切さ」の観点にある項目は重複しているところがある。  |

小説を翻訳課題とした場合、評価項目セットでは評価が難しいことが、大学院生のコメントから明らかとなった。

##### ・段階2

段階1での大学院生による評価項目セットについてのコメントと、石原による評価項目セットをもとに、先行研究の課題である評価基準を設定し、小説の翻訳評価項目の作成を行った。「正確さ」と「分かりやすさ」の2つの観点に加え、小説の内容理解

を評価する「小説の特徴理解」を含む3つの観点とした。新たに追加した観点Cの「小説の特徴理解」では、「場面」、「心情」、「性格」の3つとした。その理由として、学習者に小説の内容理解を促す上で、登場人物の理解に加え、場面、人物の心情、登場人物の性格について推測し、学習者が基本的な情報をつかむことが重要であるからである（田中・島田・紺渡，2011）。各観点につき3つずつの項目を設け、5件法で評価する評価尺度を作成した。

表3 小説の翻訳評価項目

| 観点         | 内容   | 項目   |
|------------|--|--|
| A. 正確さ     | 起点テキスト(原文)の意味内容が正確に理解されている。                              | 1. 原文の語彙を正確に理解して訳している                      |
|            |  | 2. 原文の文法を正しく理解して訳している                      |
|            |  | 3. 原文の伝える情報を正しく理解して訳している                   |
| B. 分かりやすさ  | 必要に応じて、言い換え、省略、補足がなされており、訳文が分かりやすく、原文の文脈や訳文の読者を考慮して訳している | 4. 原文の文脈に即して訳文の語や表現を選択している                 |
|            |  | 5. 訳文の一文一文がわかりやすい日本語で訳している                 |
|            |  | 6. 訳文全体が読み手にとり分かりやすい日本語である                 |
| C. 小説の内容理解 |  |  |
| 場面         | 小説に関する特徴の一つである場面について推測して訳している                            | 7. 登場人物による対話文がどのような場（状況）でなされているのか推測して訳している |
| 心情         | 小説に関する特徴の一つである心情について推測して訳している                            | 8. 登場人物が出会う場面と登場人物による対話文での心情を推測して訳している     |
| 性格         | 小説に関する特徴の一つである性格について推測して訳している                            | 9. 登場人物の性格を推測して訳している                       |



・段階3

英語教員による小説の翻訳評価項目についてのコメントをもとに、項目の修正をした。第3段階では、英語教員との議論を経て、教室内での使用を目指した、小説の翻訳評価項目を完成させた。

表4 小説の翻訳評価項目（修正版）

| 観点         | 内容                                   | 項目   |
|------------|--------------------------------------|--|
| A. 正確さ     | 起点テキスト（原文）の内容が正確に理解して訳している           | 1. 原文の語彙を正確に理解して訳している<br>2. 原文の文法を正しく理解して訳している                         |
| B. 分かりやすさ  | 訳文がわかりやすく、原文の文脈や訳文の読者（大学生）を考慮して訳している | 3. 訳文が、文脈に即してわかりやすい日本語で訳している（一文レベル）<br>4. 全体の文章を、文脈に即してわかりやすい日本語で訳している |
| C. 小説の特徴理解 | 作品中での作者の意図を理解して訳している                 | 5. 登場人物についての描写を理解して訳している<br>6. 登場人物の状況描写（場面）を理解して訳している                 |

第3節では、作成した小説の翻訳評価項目の内容的妥当性と表面的妥当性を検証した。第1項では、小説の翻訳評価項目の内容的妥当性を2016年9月に実施したこと、評価者は、翻訳と英文和訳を専門とする大学英語教員1名に依頼したことを示した。大学英語教員による内容的妥当性の検証では、大学生を対象とし、①小説を課題として「英文和訳」ではなく「翻訳」を求めていること、②実用性を考えると3つの観点に対して全6項項目を設定していることから、本調査で作成した小説の翻訳評価項目は妥当であると判断されたが、以下の3点について修正が必要であると指摘された。

- (1) 本調査で使用した小説以外の他の小説を翻訳課題とした場合、観点B「分かりやすさ」では「訳文の読者」ではなく、「想定される読者」と修正すること。
- (2) 「分かりやすい日本語」とは何か、定義を示すこと。
- (3) 観点Cについては、各項目に対する詳しい評価基準を示すこと。

大学英語教員による指摘を受け、小説の翻訳評価項目を修正し、以下に示す小説の翻訳評価項目を完成版とした。

表 5 小説の翻訳評価項目（完成版）

| 観点         | 内容                                     | 項目   |
|------------|--|--|
| A. 正確さ     | 起点テキスト（原文）の内容が正確に理解して訳している             | 1. 原文の語彙を正確に理解して訳している<br>2. 原文の文法を正しく理解して訳している                       |
| B. 分かりやすさ  | 訳文がわかりやすく、原文の文脈や想定される読者（大学生）を考慮して訳している | 3. 訳文の一文一文が、文脈に即して分かりやすい日本語で訳している<br>4. 全体の文章を、文脈に即して分かりやすい日本語で訳している |
| C. 小説の特徴理解 | 作品中での作者の意図を理解して訳している                   | 5. 登場人物についての描写を理解して訳している<br>6. 登場人物の状況描写（場面）を理解して訳している               |

\*「分かりやすい日本語」とは、首尾一貫性と一連の文法的に独立した文を結びつけた筋の通った、読み手の理解を助けるよう配慮された日本語と定義する（染谷，2010）。

表面的妥当性と信頼性の検証の際には、表 5 に示す小説の訳文評価項目（完成版）を使用した。第 2 項では、2016 年 9 月に実施した表面的妥当性の検証は、英文学科に所属する大学生 2 名に依頼したことを述べた。表面的妥当性の検証実施にあたり、翻訳課題である *Super Frog Saves Tokyo* について説明した後に、小説の翻訳評価項目を提示し、各項目が何を測定しようとしているように見えるのか、記述してもらった。記述内容については、以下に示す。

表 6 大学生 1 による各項目に関する記述

| 項目   | 記述内容                                  |
|------|---------------------------------------|
| 項目 1 | 前後の文脈を把握して、単語の意味を理解しているか              |
| 項目 2 | 文法をよく理解しているか                          |
| 項目 3 | 英文の解釈を正しくした上で誤解の生まれない（わかりやすい）日本語を作る能力 |
| 項目 4 | 日本語訳をした時の読みやすさをみている                   |
| 項目 5 | 登場人物にどのような特徴があるか                      |
| 項目 6 | 小説の情景を意識した語を用いているか                    |

表 7 大学生 2 による各項目に関する記述

| 項目   | 記述内容  |
|------|---|
| 項目 1 | 文脈を考えた、英語の語彙力があるか                                     |
| 項目 2 | 英語の文構造をしっかりと理解しているか (文法力があるか)                         |
| 項目 3 | 直訳になりすぎず、わかりやすい日本語で書かれているか<br>日常で使うような伝わりやすい表現で書いているか |
| 項目 4 | 文と文の繋がりが不自然ではなく、読みやすいかどうか                             |
| 項目 5 | 登場人物の特徴を理解しているか                                       |
| 項目 6 | 状況描写についてイメージし、理解して表しているか                              |

各項目が何を測定しているように見えるのかについて、大学生 2 名による記述内容が一致しているかどうかの確認を、筆者と高等専門学校にて英文学を専門とする英語教員 1 名により行い、大学生 2 名による記述内容がおおむね一致していることを確認した。この結果から、小説の翻訳評価項目が表面的妥当性を伴っていることが確認できた。

第 4 節では、Microsoft Excel 2013 を用い、翻訳課題を、小説の翻訳評価項目を用いて、3 名の評価者 (高等学校英語教員 1 名、高等専門学校英語教員 1 名と筆者) により評価した結果を、実験者である筆者の評価を基準として  $\pm 1$  の範囲で、各評価者による全項目に対する一致率を算出し、本調査で作成した小説の翻訳評価項目表の信頼性を検証した。本調査の調査対象者は、私立大学にて、選択性の英語授業を受講する大学生 14 名であった。

表 8 項目と全項目に関する評価者間における一致率 (%)

| 項目   | 一致率 (%) |
|------|---------|
| 項目 1 | 97.6    |
| 項目 2 | 100.0   |
| 項目 3 | 100.0   |
| 項目 4 | 100.0   |
| 項目 5 | 100.0   |
| 項目 6 | 95.2    |
| 全項目  | 98.8    |

各評価者による全項目に対する一致率を、実験者 (筆者) の評定値を基準として  $\pm 1$  の範囲で、各評定者による全項目に対する一致率を算出した。3 人の評価者による全項目数 ( $42 \times 6 = 252$ ) に対して、実験者の評定値を基準として、 $\pm 1$  の範囲で各評価者の全項目での評定値は 249 であった。実験者の評定値を基準とした、全項目に対する各評価者の一致率は、 $(249/252) \times 100 = 98.8\%$  であり、高い一致率が得られた。第 5 節では、本章の結果を、専門家により内容的妥当性が確認されたこと、表面的妥当性が

確認されたこと、信頼性の検証では高い一致率が見られたこと、の3点にまとめ、考察を述べた。

考察において、本調査の課題として①調査対象者の人数を増やすこと、②評価基準の曖昧さを改善すること、③文体の一致に関する項目の追加を検討すること、の3点を指摘した。

#### 第4章 翻訳指導による翻訳プロダクト変化の検証

第4章では、翻訳指導の効果を検証すべく、研究課題の2つ目と3つ目に答える調査を実施した。第1節では、研究課題2つ目と3つ目共通の翻訳指導の目的について述べ、文章理解モデルを援用し、学習者の訳出に焦点をあて、英文和訳から翻訳へ転換を目指すことが、翻訳指導の目的であることを示した。第1項では、翻訳指導対象者は、私立大学で必修の英語授業を受講する大学1年生35名であり、翻訳指導材料では、*Tuesdays with Morrie*（「モリー先生との火曜日」）を用いたことを示した。第2項では、翻訳指導内容を示した。翻訳指導は、2014年度後期に、全7回の翻訳指導（各30分）を実施した。第1回目翻訳指導において、英文和訳と翻訳の違い、小説のあらすじについて説明した。第1回目翻訳指導以降では、宿題として翻訳課題を日本語に訳させた。翻訳課題ワークシート1と2に対する翻訳指導を以下の2つの手順で行った。

- (1) 大半の学習者は、英語を苦手としていたことから、翻訳指導を行う前に、学習者が、宿題として課した翻訳課題ワークシートに取り組み産出された訳文と教師による英文和訳例を参考に修正する時間を設け、学習者に修正訳を求めた。その理由として、学習者は英語を苦手としていることから、文法や語彙の意味を十分に理解していないことを考え、翻訳指導前の学習者の訳文を教師による英文和訳例をもとに修正させることで、学習者の訳文の統制を試みた。つまり、学習者のテキストベースでの理解をある程度同じものにさせ、そこで産出された英文和訳を土台として、翻訳指導を実施した。学習者の訳文の質の統制をしてから翻訳指導を実施するという手順は、染谷による翻訳指導では行われていない。本章での学習者は、英語を苦手としていることから、学習者間での訳文の質の差を少なくするためにも、学習者が宿題で産出した訳文をもとに、教師による英文和訳例を参考に訳文を修正させ、学習者の訳文の質を統制した後に、翻訳指導を実施した。
- (2) 状況モデルを経て訳を産出することができるよう翻訳指導を行い、学習者は、(1)での訳文を、文脈の意を汲んだ訳語を選び、読み手にとりわかりやすい日本語で書かれた訳文へと転換することを求めた。

第2節では、2つ目の研究課題に答えるべく、事前テスト・事後テストにおいて、学

習者により産出された訳文を、第3章で作成した小説の翻訳評価項目を用いて評価し、翻訳指導の効果を量的に検証した。第1節で示した調査対象者35名のうち、データに欠損のない11名を分析の対象とした。事前テストと事後テストで使用した翻訳課題は、翻訳教室より村上春樹作「かえるくん、東京を救う」の英訳、*Super Frog Saves Tokyo*の冒頭部分を使用した。第2項では、事前テスト・事後テストにて、学習者により産出された訳文を、小説の翻訳評価項目により評価した結果を示した。

表9 項目ごとの事前・事後における5件法による評価の平均値と標準偏差 (N=11)

|                                   | 事前   |     | 事後   |      |
|-----------------------------------|------|-----|------|------|
|                                   | M    | SD  | M    | SD   |
| 1. 原文の語彙を正確に理解して訳している             | 1.64 | .92 | 2.18 | 1.08 |
| 2. 原文の文法を正しく理解して訳している             | 1.73 | .65 | 2.18 | .87  |
| 3. 訳文の一文一文が、文脈に即してわかりやすい日本語で訳している | 1.91 | .70 | 2.18 | .87  |
| 4. 全体の文章を、文脈に即してわかりやすい日本語で訳している   | 1.82 | .98 | 2.36 | 1.12 |
| 5. 登場人物についての描写を理解して訳している          | 2.18 | .87 | 2.36 | 1.12 |
| 6. 登場人物の状況描写(場面)を理解して訳している        | 2.00 | .77 | 2.36 | 1.03 |

事前テスト結果と比べ、事後テストでは、全項目の評価に向上がみられた。第3項での考察では、事後テストにおける学習者の訳文は、翻訳課題の意味内容を把握し、全体として筋の通った、読み手にとって、分かりやすい日本語で産出されていたことから、文章理解モデルを援用した翻訳指導の効果は確認されたと結論づけた。本調査の課題として、①調査対象者の人数を増やすこと、②翻訳指導の効果を実験群と統制群を設けて検証すること、の2点を指摘した。

第3節では、3つ目の研究課題に答えるべく、翻訳指導による学習者より産出された訳文の変化について、質的に調査した。第1項では、調査内容として、調査3での目的を示した。第2項では、全7回の翻訳指導で学習者に配布した翻訳課題ワークシート1と2で、学習者の訳文に見られた変化を分析し、その変化を明らかにした。翻訳課題ワークシート1では①訳語の選択、②代名詞の理解、③一文構造の把握、翻訳課題ワークシート2では①訳語の選択、②代名詞の理解、③対話文の理解に分類し、翻訳指導前と翻訳指導後で学習者により産出された訳文を分析した結果を、以下の2つにまとめることができる。

- (1) 翻訳指導前の学習者による訳文は、文脈を考えず、一語一句を辞書の訳語をあてはめた不自然な日本語で書かれていた。
- (2) 翻訳指導後の学習者による訳文は、文脈に合う訳語を選択し、読み手(第3者)

を意識した日本語で訳文が産出される傾向にあった。

これらの結果から、文章理解モデルを援用した翻訳指導により、学習者により産出された訳文は、翻訳指導の目的である英文和訳から翻訳への移行、状況モデルを経て訳文を産出している傾向にあると考察した。本調査の課題として、学習者の英語力を考慮した上で、翻訳指導で使用する材料を選択する必要があることを指摘した。

## 第5章 結論

第5章では、第1節では本論文の要約と総合的考察を示した。本論文で設定された研究課題への解答は以下にまとめられる。

①教室内での使用を目指した小説の翻訳プロダクト評価尺度とは、どのような観点と項目で構成されているのか（調査1）。

小説の翻訳評価項目の内容的妥当性と表面的妥当性の検証結果により、妥当性は確認された。また、信頼性の検証では、高い一致率が見られたことから、本論文で作成された小説の翻訳評価項目の妥当性と信頼性を確認できたと結論づけた。これらの検証結果から、教室内での実用化を踏まえた小説の翻訳プロダクト評価尺度は、「正確さ」、「分かりやすさ」、「小説の特徴理解」の3つの観点と、各点に対して2つの項目、全6項目により構成されることが明らかとなった。

②翻訳指導によって、学習者の訳文には、どのような量的変化が見られるのか（調査2）。

本調査1で作成した小説の翻訳評価項目を用いて、翻訳指導前と翻訳指導後に行った翻訳課題の結果を検証したところ、翻訳指導後での小説の翻訳評価項目の結果が向上していた。

③翻訳指導によって、学習者の訳文には、どのような質的变化が見られるのか（調査3）。

翻訳指導前と翻訳指導後において、学習者により産出された訳文に見られた変化を分析した結果、翻訳指導前と比較し、翻訳指導後の学習者により産出された訳文は、文脈に応じて訳語の選択がなされており、読み手を意識した分かりやすい日本語で訳文が産出されていた。翻訳指導前では、学習者は、代名詞が何を指しているのかを考えずに訳出しており、先行研究で指摘されていた英文和訳の問題（第2章参照）が確認された。英文和訳の問題を改善するため、英文和訳から翻訳への転換を目指し実施した翻訳指導後では、学習者は代名詞を理解して、分かりやすい日本語で訳文を産出していた。翻訳指導前と比較し、翻訳指導後における学習者の訳文に見られた変化を、以下に再提示する日本人英語学習者の翻訳プロセスモデル（図1, p.5）により、説明することができる。翻訳指導前では、学習者はルート（1）の

テキストベースを経て英文和訳を産出している傾向にあった。この時点では、学習者の訳文は、文法理解がままならならず、学習者間での訳文の質に差が見られた。そのため、教師（筆者）により提示された英文和訳例をもとに、学習者に訳文の修正を求めた。その理由として、翻訳指導を実施するにあたり、学習者のテキストベースでの理解、つまり原文の表面的な理解（文法理解や語彙の意味理解）をある程度同じものにし、学習者に英文和訳を再度産出させる必要があったからである。学習者に修正させた英文和訳を土台として、英文和訳に関する問題の改善を目指し、原文の内容について、学習者に深い理解を促す翻訳指導を行った。その結果、翻訳指導後では、翻訳指導前では学習者の訳文に見られなかった①文法を理解していたこと、②文脈を考えた訳語の選択がなされていたこと、③読み手にとり分かりやすい日本語で訳文が書かれていたこと、が学習者の訳文に見られた。これらの結果から、翻訳指導により、学習者の訳文が、ルート（1）のテキストベースでの理解をもとに産出した英文和訳から、ルート（2）の状況モデルを経て、産出する翻訳へと変化が見られたとすることができる。ゆえに、英文和訳に関する問題と日本人英語学習者の訳出過程を説明する文章理解モデルを援用した日本人英語学習者の翻訳プロセスの適切性と翻訳指導の効果は確認されたと、結論づける。

第2節では、本論文から得られた教育的示唆を提示した。

#### (1) リーディング指導における翻訳指導の提案

本論文で実施した文章理解モデルを援用した翻訳指導は、先行研究で指摘されている英文和訳の問題に対して効果があることが確認されたことから、リーディング指導において、深い読みを促す翻訳を用いて指導することへの提案につながる。

#### (2) 教室内での小説の翻訳評価項目の使用の提案

第3章で作成した、小説の翻訳評価項目を活用することで、教師は、客観性を持って、診断的に学習者の訳文を評価できる。

#### (3) 国語教育との連携

本論文の結果から、学習者が、日本語を介して英語を学ぶことの重要性を確認できたことで、英語教育と国語教育の連携への提案につながる。

第3節では、本論文の課題点として、①調査対象者の人数を増やすこと、②小説の翻訳評価項目の評価基準の改善すること、③学習者のレベルに合わせた材料を翻訳課題と翻訳指導で使用すること、④学習者の国語力を測るテストを実施すること、の4点を挙げた。

## 参考文献

- Albom, M. (1997). *Tuesdays with Morrie: An old man, a young man, and life's greatest lesson*. New York: Broadway Books.
- Cook, G. (2010). *Translation in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Council of Europe (2002). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- House, J. (2001). Translation quality assessment: Linguistic description versus social evaluation. *Meta*, 46, 243-257.
- House, J. (2009). Quality. In M. Baker, & G. Saldanha (Eds.), *Routledge encyclopedia of translation studies* (pp. 222-225). London and New York: Routledge.
- Ishihara, T. (2009) Developing an analytic evaluation scale for English-Japanese translation: Considering its reliability using generalizability theory. *ARELE*, 20, 171-180.
- Jakobson, R. (1959). On linguistic aspects of translation. In R.A. Brower (Ed.), *On translation* (pp.232-239). Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Kintsch, W. (1998). *Comprehension: A paradigm for cognition*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Van Dijk, T. A., & Kintsch, W. (1983). *Strategies of discourse comprehension*. New York, NY: Academic Press.
- Venuti, L. (2000). *The translation studies reader*. London/New York: Rutledge.
- 石原知英 (2009).「英文和訳の評価：分析的評価尺度の策定と検証的因子分析による妥当性の検討」『中国地区英語教育学会研究紀要』30, 61-70.
- 卯城祐司 (2009).『英語リーディングの科学—「読めたつもり」の謎を解く』研究社.
- 静哲人 (2002).『英語テスト作成の達人マニュアル』大修館書店.
- 柴田元幸 (2013).『翻訳教室』朝日新聞出版.
- 染谷泰正. (2010).「大学における翻訳教育の位置づけとその目標」『外国語教育研究』3. 73-102.
- 染谷泰正・河原清志・山本成代 (2013).「英語教育における翻訳 (TILT: Translation and Interpreting in Language Teaching) の意義と位置づけ」Retrieved from [http://someya-net.com/99-MiscPapers/TILT\\_Symposium2013.pdf](http://someya-net.com/99-MiscPapers/TILT_Symposium2013.pdf)
- 辰己明子 (2015).「大学英語教育における翻訳指導に関する研究：一般英語授業での翻訳指導実践を事例として」『通訳翻訳への招待』13, 67-82. Retrieved from [http://hon-yakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai\\_vol13/No\\_13-004-Tatsumi.pdf](http://hon-yakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol13/No_13-004-Tatsumi.pdf)
- 田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸 (2011).『推論発問を取り入れた英語リーディング指導 深い読みを促す英語授業』三省堂.
- 鳥飼玖美子・河原清志 (2013).「外国語教育への応用①：文法訳読と翻訳」鳥飼玖美子 (編著)『よくわかる翻訳通訳学』(pp.102-103) ミネルヴァ書房.
- 羽鳥博愛 (1982).『心理言語学と英語教育』大修館書店.
- 山岡洋一 (2001).『翻訳とは何か 職業としての翻訳』日本アソシエーツ.



山田雄一郎 (2006). 『英語力とは何か』 大修館書店.

吉田真美 (2001). 『テキストを超えた理解：読みにおける推論過程』 門田修平・野呂忠司 (編) 『英語リーディングの認知メカニズム』 (pp. 149-162) くろしお出版.